

(株)テレビ静岡相談役 曾根正弘氏に聞く (2)

曾根正弘 (そね まさひろ)
(株)テレビ静岡 相談役
(聞き手：普及誌編集委員)

(株)テレビ静岡相談役 曾根氏のインタビューの第2回です。特派員として海外45カ国での取材活動を経て、テレビ静岡の経営者として早くからインターネットやクロスメディアに着目される等、長年テレビ業界で活躍されてきた曾根氏に、放送、情報、地域、国際といった幅広い視点からお話を伺いました。今回は、現在取り組まれている静岡での地域企業の情報発信、かつての特派員時代のソ連との不思議な縁、経営情報学会へのメッセージなどについて伺いました。

目次

1. 地域企業の情報発信
2. 東の医、中部の食、西の光
3. やらまいか、やめまいか
4. 劇場型の特派員生活
5. ソ連8月クーデター
6. 経営情報学会へのメッセージ

1. 地域企業の情報発信

聞き手：経営情報学会には、情報サービスを提供する企業で働く実務家も、情報サービス業を対象に調査研究をしている研究者も所属しています。曾根さんは、商工会議所の情報文化部会の会長として、静岡の地域企業が情報サービス業をどう使って上手に発信していったらいいかという取り組みをされておられます。情報サービス業を使うユーザーサイドでの取り組みや、どのような成果があったのでしょうか。

曾根：情報文化部会はIT関係の企業と放送、印刷の業者が百数十社くらい集まっている会です。情報に関連する企業とはいっても、考え方も背景もみんな同じではありません。共通性があるところからやっていかないといけないのです。

今やインターネットの広告料は、テレビよりはまだまだかなり小さいですが、新聞、ラジオ、雑誌の三つを加えたくらい大きいんですね。ですからインターネットをうまく活用するための活動を一生懸命やっています。

まずはWi-Fiの通信環境整備です。半径20mくらいの広さには電波が伝わらないので、拠点を何百カ所も作らないといけないんです。京都は500カ所くらいWi-Fi拠点が有り、福岡も盛んやっていますが、静岡はまだ弱い。拠点作りはすべて公費ではできないので、商店等民間の自助努力でやれるよう支援をしています。商工会議所のリードで、NTTなどの通信業者とも連携し、拠点の散らばり具合を調べ、どの辺りに重点を置いて設置すべきかをシステムティックにやるわけです。

ほかにはホームページを効果的に作れるよう指導する手法として、ホームページ・コンテストを開催しています。上位の企業に講師になってもらい、他の企業に対して講演をしてもらうというセミナーをやるんです。

聞き手：地域の連携の中で、上手くいっている人が、これからの人に教えるノウハウ共有の場といったイメージでしょうか。



曾根: そうですね。大学や研究機関の方に来ていただく講演会もしますが、優秀な人から教わるだけでなく、お互いに教え合って切磋琢磨していこうということなんです。理論や研究のレベルは、実務的な面で必ずしも現場的じゃない場合もあります。そこで、実際にやっている人が講師になる仕組みも入れ、両輪でやるんです。私が始めて4年ですが、その効果が現れてきていると感じています。

情報文化部会の活動は、全体の利害が一致するテーマをピックアップしていかないといけません。特定の業界のことをみんなで取り組んでもしょうがないので、テーマの決め方やアプローチの仕方が結構難しいんですが、共通の利害に関わることでだけでも相当あると思います。

聞き手: お互いに学ぶピアラーニングの関係性を上手に作ることで、地域が少しずつ底上げをされ、元気になるということでしょうか。

曾根: そのとおりです。静岡は地域のまとまりがいいと思いますね。商工会議所以外にも、経営者協会や経済同友会、ニュービジネス協議会といったさまざまな経済団体や組織が、それぞれに熱心にやっていますし、協力し合って新しい考え方を取り込んでいると思います。

2. 東の医、中部の食、西の光

曾根: 私が今現在力を入れているのは、ニュービジネス協議会の取り組みです。実は11月20日の全国大会（注：第10回新事業創出全国フォーラム in 静岡）の実行委員長でして、今回のテーマは「20年後のビッグビジネスを語る」というタイトルなんです。そこには当然テクノロジーが加わってくる。

20年後のビッグビジネスとは何だろうと思ったとき、やはりそれはモバイルです。携帯のモバイルではなく、いろんな意味でのモビリティ、「移動手段」が格段に発達するということです。そこで、今回はホンダさんに基調講演をお願いしました。ホンダは車だけではなく、二足歩行で移動するロボットも航空機も作っています。モバイル性の高い一人乗りのちょっとした乗り物も開発しています。

未来に向けて新たな事業をみてみよう、をテーマに、県内の有力な方々、研究者に加わってもらって

パネルディスカッションもやります。

聞き手: 静岡全体で新事業やビッグビジネスを語るのでしょうか。それとも中心となる特定の地域があるのでしょうか。

曾根: 全体です。静岡は、東は医療や関連事業のレベルが高くファルマバレー（注：医療産業を推進する富士山麓先端医療産業集積構想の中心地）という言葉があります。中部は緑茶やかつおなどの地場産品の機能性成分の研究や、新たな食品関連産業を創出するフーズ・サイエンスが集積しています。西は世界初の電子式テレビ技術を継承する光、電子関連に強く、フォトンバレーと呼ばれています。

パネルディスカッションには、東部からは静岡がんセンターの総長・山口 建氏が、中部からは医薬と食の世界で、ライフサイエンス分野に優れた静岡県立大学の学長・木苗直秀氏が、西部からは、浜松ホトニクス株式会社の中央研究所長・原 勉氏に参画いただきます。

そんなわけで、静岡全体の産業クラスターも関係するし、これからの未来を考えるうえで有力な個人の能力も発揮してもらおう考えです。

聞き手: がんセンターは医療の拠点ですが、必然的に情報拠点にもなっていますね。すごい情報量が集まるので、医療情報ネットワークの拠点ですよ。

曾根: ビッグデータですよ。インフラとしても一大センターです。静岡は産業のパラエティに富んでいますから、その相乗効果も大きいと思います。

聞き手: 私は清水で東の出身ですが、静岡は東と西で対立構造がありますよね。文化やヒトの気質が違うといえますか…

曾根: それはありますね。でもニュービジネス協議会は全県の組織ですけどね（笑）。

3. やらまいか、やめまいか

曾根: 静岡県は文化圏的に日本のなかの西と東の接点ですから、昔からいろんな意味で分かれているんですよ。電気の周波数も富士川を境に50サイクルと60サイクルで違いますしね。日本の国の中の「民族性」の境い目にもなっています。

西の浜松は家康の出身地の岡崎に近く、家康は幼少の頃と大御所時代を駿府（静岡）で過ごしていま

す。だから、両方とも家康文化かと思いきや、静岡市（東）のほうは、どちらかと言うと土台は今川文化ですね。

浜松はかつて遠州とも三河とも言われた地域で、三河と言えば豊橋です。三河、遠州の辺りの気風は、今の静岡、駿河の気風と全く違う。

しかも両方家康が関わっているんです。家康公は今の静岡市、駿府で幼少時代を過ごしているんですね。戦国の世が終わって、大御所という形で駿府に戻って、最後の10年間位を過ごすんです。その家康が、幼少期を終えて成年になり、これから伸びる、という時期は浜松にいました。だから浜松城のことを出世城とも呼んでいます。

浜松は進取の意気が非常にあるんですね。「やらまいか」って言うんですが、なんでもやってみようということ。一方、静岡市は「やめまいか」っていまして、どちらかというとな慎重派です。

聞き手：世界に向けて発信する創造的なメーカーは浜松ですね。ホンダやスズキ、ヤマハもそうです。

曽根：日本のテレビを最初に作ったのも浜松ですから。高柳健次郎博士がカタカナの「イ」の字を初めて映したのが1926年です。その流れが今の浜松ホトニクスという企業ですから。

一方の静岡市は行政の町であって生産の街じゃないんですね。強いて言えば旧清水市が合併して今の静岡市になって、旧清水市は産業があるんですよ。製造業も港もありますからね。清水港（しみずみなと）は江戸時代から港として栄えていたし、明治維新になってからお茶の輸出で栄え、現在、マグロは全国一の水揚げ量です。

マグロは目利きが選んだマグロと普通に買ったのと全く違いますからね。回転寿司でも東京よりはるかに安くておいしいですよ。

4. 劇場型の特派員生活

曽根：一つソビエトの話でね、言い残したことがあるんでね、それは盗聴・尾行・監視の話。当時のKGB、秘密警察ですね。われわれ特派員だけでなく外国高官、大使館、領事館の人間は見張られるわけです。特に盗聴が非常に盛んで、四六時中監視されてたんじゃないかと思えます。

赴任したばかりの頃、私が支局庁舎に出勤すると、妻は自分の車がなかったのでバスを利用していました。当時、ソ連のバスは床に隙間があって、道路が見えるんです。今は違いますよ、2年前に行ったときは完全に違いましたが、当時はバスについての車輪の大きさも違って、こんなになって（大きく揺れる仕草）走ってる時代でした（笑）。

それが嫌で、いよいよ自分の車が欲しいということになって、フィンランドで日産の小さな車を買ったわけです。それが届いて税関に取りに行ったら、キーが一つしかない。車のキーは必ず二つ以上あるのに、担当者は初めから一つだった、と言い張るので、仕方ないから乗って帰ってきた。それから1週間後くらいに妻の運転で助手席に乗ったら、妻が「おかしいわ」と。扉の内貼りがベコベコで、新車なのに明らかに変ですよ。おかしいなあ、こんなこと昨日までなかったじゃない」と言って終わったんです。ところが、翌日、家内が「あなた大変よ」と走ってきて「内貼りが元に戻っている」と。見に行くと本当にピタッと綺麗になってたんですよ。多分盗聴器ですよ。でもね、向こうでは、それが当たり前でした。家でも、必ずあるのがリビングと玄関、それ以外におそらく寝室だろうと。暮らしていても、劇場的な感じですよ（笑）。

支局は、住まいとは別で、車で夏だと15分位、雪が積もる冬だと40分位かかるころでした。1週間くらい他の国を取材して帰ってくると、中に大きな靴の跡がある。泥靴の跡が。私がいなくて来て、いろいろ点検したということです。私の階の下がAPというアメリカの通信社だったんですよ。その記者がきつと入るだろうと「Welcome to my house」って書いておいて、帰ってきたら「Thank you」って書いてあったって言うんですよ（笑）。

足跡残すくらいですから堂々たるものです。これはね、ひょっとしたらわからないようにやろうというのではなく、わざとで、脅しじゃないかと。

聞き手：彼らはプロでわからないようにすることもできるから、お見通しだぞ、という合図だと…

曽根：それです。ベコベコも、少なくとも何かをしたという脅しじゃないかと。そんな嫌がらせのようなことを毎日経験しながらやっていたんですよ。

初めのうちはかなり精神的にまいるけど、そのう

ち慣れてくると、聞かせるためにわざと何か言うとかね（笑）。

例えば、娘の学校の椅子が、釘が出ていたり、ささくれが酷くて、タイツや靴下がひっかかって電線するらしいんですよ。夏休み前に「しょうがないわねえ」と妻が自宅で近所の方と話して、学期が明けたら学校中の椅子が新しくなっていたんですよ。妻の会話を聞いた結果だと100%は言い切れませんがね。でもそれがあったんだろうと思います。

というようにね、後半はこちらも慣れて、聞かれていることをむしろ使うようになりましたね（笑）。

聞き手：たくましくなりますね。

曽根：ただ、帰国してから暫くは、今この話をしているか必要以上に考える癖がついていましたね。言い出す前に、この話今出していいかな、とかね、全然問題ないのね。

通信を傍受するのも日常茶飯事です。現在も各国が関心を持って対応していると思いますが、日本はそういうところに無頓着すぎるように思います。

当時はソビエトと日本では特派員の数と同じでなければならぬという取り決めがあったんですよ。向こうは特派員の数はずっと少なくていいはずなんです。国営タス通信とプラウダ（注：ソ連共産党の機関紙を発行していた新聞社）の2名いれば十分。こっちは新聞各社にNHK等のテレビも含め15人くらいいましたが、同じ数を日本に駐在させると言ってくるわけです。それは半分以上スパイでしょうね。当時ならではこうした状況がありましたね。

そういう「純粋な」共産主義、純粋な秘密警察国家というものを見たのはわれわれの世代が最後かもしれない。本物の資本主義とは言えなくても、一応資本主義となった今のロシアともまた違いますから。当時は本当に共産主義の真っ只中で、80年代の状況を知る者にとっては、現在のように品物が街にあふれるようになったことはすごい驚きです。

5. ソ連8月クーデター

曽根：モスクワの話ばかりでしたが、特派員としては他国のほうが長いんです。ただ、ソビエト、ロシアを巡って私の特派員人生が回っていたなと思っています。

私がニューヨークに行った1989年にベルリンの

壁が崩壊しました。90年にロンドンに移った翌91年にソビエトが崩壊したんです。1991年の2月、すでにバルト3国が独立したくて怪しい状態になっていました。それを抑え込もうと来たソビエトの特殊部隊との銃撃戦があり、死者も出ていました。私はリトアニア、ラトビア、エストニアの3国を回ってレポートしていたんですが、あの辺のバルト三国の連中はロシアなんかものともしてなかったですね。すぐ後ろに特殊部隊の人間が銃持って飯食っているのね、あいつらバカだから、とか言って、そのくらい平気で抵抗していました。

曽根：バルト三国の取材を終え、モスクワ経由でロンドンに帰る際、知人のウクライナ人で外務省の役人がモスクワにいて、すごくいいやつだったんで電話したんです。そしたら「来いよ」なんて呼んでくれて、話をしていたら、「今、何が欲しい」と聞くんです。その時ひらめいたのが何回も出入りできるマルチビザです。それが直後にまさか生きたとは思わずに「くれる？」と。本当はモスクワ駐在の特派員にしか出ないビザを「いいよ」と作ってくれたんです。彼は外務省でそれなりに偉くなっていましたから。それを貰って、ロンドンに帰りました。

そしたらその年の8月19日にクーデターが起きたんです。3日天下で21日に収束することになったクーデターです。

その朝ロンドンに東京から電話がかかってきて、今クーデターが起きて、ゴルバチョフが幽閉されて、空港は閉鎖されたわけではないけど、ビザを持ってないから、誰も入れなくなっちゃったと。困っているというので「僕ビザ持っています」って言ったら、「えーっ、すぐ行ってくれ」ということになった。その日のうちにすぐロシアに飛ぶと、夕方16時か17時頃に着きました。モスクワの中心部のウクライナホテルの部屋に入ると、30分もしないうちに銃撃戦が始まった。クーデター自体はとりあえず武力なしで、威嚇で成功していたんですが、その後、今度はクーデターに反対する勢力との銃撃戦が始まったのが、その日の夕方でした。それに私はちょうど間に合ったんです。

ホテルから現場がすぐ近くだったので、歩いて行って、それを一部始終報道しました。モスクワに駐在していた特派員も、現場に行けば当然報道できますが、駐在しているがゆえにソビエト側のタス通

信の情報も見ていないといけない。支局にいて本社と連絡をとったり、タス通信からの情報を流したり、私にも連絡をしなくちゃいけない。だから彼は動けない。結局、現場のレポートは全部僕がやれたんです。あれはすごいことだったなと思います。

曾根：3日天下が収束して、エリツィンがロシア共和国大統領として勝利宣言をしました。ホワイトハウスと称される建物（注：ベールイ・ドーム＝ロシア共和国最高会議ビル）のバルコニーで、彼が「われわれは勝利した」と演説をして、いかにも民主勢力が勝ったような印象だったんです。共産主義政権の下でしたから。ゴルバチョフがソビエト連邦の大統領、ロシア共和国の大統領がエリツィンです。

その晩のこと。KGB本部の前に大きな広場があり、その真ん中にKGBの初代長官ジェルジンスキーの銅像が立っているんです。それをみんなで首にワイヤーのロープをかけて、どこかから大きなクレーンを持ってきて、引き倒して、吊り上げたときに「わーっ」という5,000人くらいの大歓声が、その光景が見られた。その時は、まさか取材したほうがいいとは予想できなかったので、カメラマンがいなかった。ですから、僕が見るしかなかったんですけど、あれはものすごく歴史的な瞬間だったんですよ。さらに、その年の12月にソ連が崩壊するわけだから。

結局、私の海外特派員生活は、なぜかいつもソビエトやロシアに関係があった。私がワシントンにいた時にゴルバチョフが来て、ニューヨークにいたときにエリツィンが来た。エリツィンは初めて西側の国に来たときで、ニューヨークのマンハッタンの上をヘリコプターで飛んで、その後降りて五番街をずっと歩いた。そしたらものすごく黒人が幸せそうな顔をして歩いていて、品物はあふれているけど誰も盗んでいかないと、そういう光景を目にして相当ショックを受けていましたね。当時、われわれ記者40人くらいが同席していて、エリツィンは「ゴルバチョフは改革者じゃない」とか批判していましたよ。エリツィンとその時握手した。2メートルくらいに見えた大きな人でした。

聞き手：まさにクライマックスですよ。

曾根：そうですね。その後ロンドンにいたときにソ連崩壊になるわけだから。何か運命的にロシアのことを報道することになっていたと思うんです。

今クリミアの情勢を見ているとすごくわかるんですね。流れがあるわけで、いくら西側がけしからんと言っても全く戻りませんね。もともとロシアの領土だったって歴史がありますから。現状がウクライナなんだから、それをああいう風に勝手に入り込んで取るというのは国際的なルールからすれば許されないことだけど、そんなことはお構いなしです。プーチンは国内の支持があるし、これを今譲ったらプーチンの立場が危ういですからね。

ナポレオンがかつてモスクワを占領したときに、間もなく引き上げざるをえなかったのは、ロシア軍の総司令官クトゥーゾフ将軍がモスクワ明け渡しを決断し、郊外に引き上げる前にモスクワ市内を焼き払ったんですね。フランス軍に食糧を与えないと、普通に家があれば何らかに利用されてしまうので全部焼き払って、持久戦で待っていたら、フランス軍が兵糧尽きた。それがロシアなんです。相手が尽きるまでは待つというね。

ナチスも同じことです。ヴォルゴグラード（注：スターリングラード）攻防戦やレニングラード包囲戦も、ものすごい勢いでやってきたけど結局ドイツ軍が敗退しています。日本だってシベリア出兵があったんですけどね。ロシアには勝てないと思います。あまりの国土の広さと寒さ。冬の季節でロシアに勝つのはまず難しい。

そういう一連の特派員生活を通じて、常にロシアとの関わりがあって、共産主義時代からソ連邦崩壊まで、一つの塊として私の経験に残ったことになります。

6. 経営情報学会へのメッセージ

聞き手：最後に経営情報学会にメッセージをお願いします。

実はわれわれの学会では、なかなか融合できないことが課題ではないかという意見があります。経営学は文系に属しますが、経営工学になると工学に属する。経営情報学会の成り立ちは、そういうものを融合してやろうという狙いだったわけです。ところが、静岡と浜松のように、異なる文化はわからないで済ませてしまう。

他の学会でも同じようなことがあるし、非常にユニークな学科を持つ学校でもいろんな人が集まる

と、なかなか同じ土俵で同じ議論をしない。

曾根さんは心理学のなかでも実験心理学という理工学的な分野でした。放送局でも技術系を経て、最後は経営に至る。両方やってらっしゃいます。曾根さんから見て、融合はどうしたらいいでしょうか。

曾根：アカデミズムは心地よいですが、その中にいるだけではだめですね。現場とのインタラクションがないといけないと思う。実際に応用していることやってみるというのが必要なんだろうなと思います。

本当の面白さは学問を究めるのではなく、学問を応用して実社会に役立てることで、その現場自体を

自分が目撃することが本当に楽しいし、おそらく意味があるのではないかなと思います。

私は結果的に、幸せな職業人生だったなと思います。やってる時はものすごく大変でしたけど、考えてみると非常に美味しいところをやったかなと思っています。私の場合、技術的なものをバックに持ち、わかったうえで経営をやったので、ちょっとニュアンスが違ってきたんだと思います。

ですから、研究者の方は、もっと研究室の外に出て、現場をいろいろ探して、自分はどこで何に貢献できるかを考えることが、生きた学問ではないでしょうか。

聞き手：どうもありがとうございました。

